

みることとはつくること—作品の社会的完成に向かって

西洋近代市民社会は、「個人」という近代的自我を持つ人間を生み出した。一個人としてこの世界に放り出された私たちは、「私は誰」なのか、「ここはどこ」で「今はいつ」なのかという自己存在への根本的な問いを発し続けることにより自由を獲得し、自律的に生きようと努力し続けて今日に至る。現代美術はそんな社会の所産であり、模索する現代人の生きざまそのものだと言えるだろう。美術作品を制作したり鑑賞したりする行為は、言わば、震える自我の居場所づくりである。そうして生まれた作品という時空は、具体的なものの形をとらない場合も多い。多様な魂の震えや叫びがストレートなアクションとして現れたり、個と世界の関係性を紡ぎ出すシステムとして提示される場合もある。当館は、再現不可能な作品やある現象を発動させるプロジェクトのコンセプトを含め、同時代美術を見出し、見守り、記述し、それらとどう関わっていくか自体を考える場所である。そこでの活動は既存の価値観を紹介して普及することとは全く異なる作業となる。展覧会は毎回が実験であり、その実験は、一部の専門家によって牛耳られるものではなく、当館を訪れる多数の子どもたちも含めた多様な鑑賞者の主体的参加があってはじめて成り立つものとなる。当館での鑑賞は、受け身で既存の情報や価値を受け取るものではない。見るという行為は新しい自分を生み出すという創造行為であり、一人の作者が自己表現として完成した美術作品を社会的存在として完成するのは不特定多数の鑑賞者なのである。そしてその営みに終わりはない。

創造の現場—メディアーターの協働

開館から5年、特に2007年度からの3カ年、設立のコンセプトを具現化すべく、私たちは美術館を公共の実験場であると位置づけ、調査研究、収集保存、企画展示、教育普及を有機的に連動させるプログラムの創出に注力した。同時に、キュレーター、レジストラ、エデュケーター、アーカイヴィスト、ライブラリアン、キュレイトリアル・アシスタントから成る開館時に数かれたスタッフ編成に加えて、2005年度にはインスタレーション・コーディネーター、2009年度にはコンサベーターを専門職として位置づけた。決して分業化ではなく、各専門スタッフひとりひとりが「メディアーターとしての美術館」を運営するメディアーターであるというコンセンサスを持ち、専門領域を横断する協働体制を築き上げ、同時多発する多彩なプログラムを次々創出する「創造の現場」としての運営スタイルを確立してきた。

毎年、コレクション展1～2本、企画展（個展、グループ展）3本、長期プロジェクト型展覧会1本、デザインをテーマとする小企画展3～4本を実施し、各展の会期は平均4ヶ月、長期プロジェクトは半年～1年というペースであるから、必然的に年間を通じて常に3～4本の展覧会が同時に開催されている状況になる。2007～9年度開催展を形式によって大きく捉えると次のとおりである。

個展7本（グレイソン・ペリー [2007年度（以下年度）]、栗津潔 [’07]、ロン・ミュニック [’08]、サイトウ・マコト [’08]、杉本博司 [’08]、横尾忠則 [’09]、オラファー・エリアソン [’09]）は、キュレーターと作家が作品世界と建築空間のリー

ディングを重ねることによって、いずれも当館独自のサイトスペシフィックな展示を実現した。グループ展8本（「パッション・コンプレックス」 [’07]、コレクション展I・II [’07]、「金沢アートプラットフォーム」 [’08]、コレクション展I「つながり」・II「shell-shelter:殻—からだ」 [’08]「愛についての100の物語」 [’09]、コレクション展「shift-揺らぎの場」 [’09]）は、キュレーターによる調査をベースとして、時代の動向や社会の機微を映し出すテーマを設定し世に問うた。長期プロジェクト型展覧会4本（アトリエ・ワン [’07]、日比野克彦によるアートプロジェクト [’07]、日比野克彦と野田秀樹のコラボレーション [’08]、西山美なコと広瀬光治のコラボレーション [’09]）は、2006年度以降継続的に採用している手法によるもので、作家とキュレーターがじっくり時間をかけて練り上げた多彩なプログラムを、美術館内の数か所の展示室をプラットフォームとして活用してトータルにプロデュースするもの。公開制作から地域社会へのアウトリーチまで、複合的に組み合わせ、参加者を巻き込んで展開した。

実験場として展覧会を機能させた結果、多くの展示は、絶えず変貌する独自の「動態展示」スタイルをとることになった。パフォーマンスとしての絵本の読み聞かせや朗読、ライブ、レクチャー等を展示室内で開催するのみならず、作品を協働でリーディングしていく作業のなかで、アーティスト・イン・レジデンス、ワーク・イン・プログレス、ワークショップ、パフォーマンスをフレキシブルに実施することが常態化した。展覧会のなかで生まれた作品、資料はもとより、プロジェクトやワークショップのコンセプト、美術作品に関連して生まれた演劇作品をも含め、当館のコレクションとして収蔵し、生きた資料とし

メディアーターとしての美術館： 金沢21世紀美術館2007—2009

不動美里（金沢21世紀美術館 学芸課長）

てアーカイブする取り組みにも挑んで来た。¹ 全スタッフ挙げての鑑賞教育への取り組みから、すでに形成してきた学校連携事業「ミュージアム・クルーズ」、「まるびいアートスクール」のプログラム内容の深化充実を踏まえ、学校教育と美術館教育の差異の認識とボランティア教育の位置づけを明確化するなかで、多様な人々が主体的に作品と鑑賞者をつなぐ活動「アートモール・スクール・プロジェクト」が新規に生まれた。展覧会と教育普及が融合し、調査研究と収集保存が連動する展開のなかで、当館の各種プログラムの要素を総動員する長期プロジェクト型展覧会というかたちが形成され、十代後半から三十代を対象とする「金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム」が始動した。開館5周年記念シンポジウム「ミュージアム・エデュケーション21」においては、現場の第一線で活躍の研究者をお招きし、狭義の教育普及を超えた美術館教育としてトータルに取り組んできた当館の活動を総括した。

未来社会に開かれたコレクション形成— 現代美術の動態展示と動態保存

当館は、2008年度以降継続して年間入館者数約150万人を数える。そのうち展覧会への有料入場者数は全入館者数の2～3割相当である。² 多種多様な目的で人々が集まり「賑わいを創出する」複合施設である当館において、決して純粋に「現代美術」が呼び集めているわけではない150万人という数字に翻弄されず、質のコントロールも含めて「現代美術館」としてのアイデンティティを維持するのが各専門スタッフの務めとなろう。展覧会入場者数の推移を注

視しつつ、私たちは開館以来一貫して自主企画を展開することをモットーとして来た。大きな数字が流布されればされるほど、現代美術が社会に果たす使命は何か、私たちが今、この地で発すべきメッセージは何かについて自らに厳しく問うて企画を立てる責務は増す。

開館後に刊行した研究紀要アール第4号巻頭インタビューにおいて、詩人で美術評論家の建畠哲氏(当時、国立国際美術館長)は、公立の現代美術館の役割について「緩慢なる市民革命の場」と結論づけた。その言葉には、21世紀に日本の地方都市に現代美術館として今後長く存続していく上での本質的な指針と根本的な存在意義が示されている。近代意識、市民意識の特質は批評精神を有する点にある。自己を相対化し、ここはどこか、私は何者か、そしてこの瞬間はいつかということ、距離を置いて見、考え、疑いを投げかける—「緩慢なる市民革命の場」たる美術館機能はこのような質をもった語りの場づくりに向かって発動する。こうした対話の集積のなかで誕生したワークショップのプログラムやプロジェクトのコンセプト、そして展覧会において生成するドキュメント類は、美術市場の商品価値とは無縁である。しかし、まさにこのような存在に美術史上・芸術学上の価値を見出し毅然と評価し収集保存していく作業こそ、公設の現代美術館の使命と言えるだろう。加えて同時代美術資料の収集はいわば時限装置を保有するようなものでもある。将来、記述されたコンセプトに添ってプロジェクトが実行されることによって予想外の事態がもたらされたり、あるいはライブの生々しい記録について至近距離からは見えなかった価値が読み解かれたり、現時点では予測不可能なことも含めて、美術作品の可能性として真摯に保存

し、未来社会へ委ねていくのが「開かれた」コレクションの在り方である。

作品をめぐる作家とともに未来を語り、作品と出会う多くの鑑賞者と実験を共にしながら新たな価値を創出していく生きたメディアとしての美術館像を私たちは思い描いている。

*1. 特にこのような認識下に収蔵に至った作品資料は次のとおり。画像はpp. 155-157に掲載。奈良美智《Dog-orama: Pup Patrol》、日比野克彦《明後日朝顔プロジェクト21》、塩田千春+岡田利規《記憶の部屋について》、KOSUGE1-16《AC-21》、トーチカ《PIKA PIKA Project in Kanazawa》、牛嶋均《転がるさきの玉 転がる玉のさき》、岸本康《YASUMASA MORIMURA: Chapter 0》、粟津潔 2750件の作品資料の受贈、山下洋輔《ピアノ炎上2008》

*2. 2004年度：250,422人、2005年度：248,553人、
2006年度：350,046人、2007年度：337,890人、
2008年度：411,803人、2009年度：374,107人

[参考文献]

「みることはつくること：金沢21世紀美術館の実験」
『平成22年度美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修記録集』国立美術館、2010年
http://www.artmuseums.go.jp/study/2010/doc_71_92.pdf

『キュレーター・ミーティング2010』
現代芸術センター CCA北九州、2011年